
Nightmare

魅惑のたまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Nightmare

【コード】

N9978T

【作者名】

魅惑のたまご

【あらすじ】

人は眠りにつくと、夢を見る。

楽しい夢だったり、悲しく恐ろしい悪夢だったり…。

そして、そんな夢が実体化した、夢幻世界で、1人の少女・沢村珠希の冒険がはじまる…

プロローグ

珠希は、夢を見た。

一面の闇の中に、独りで立っていた。

どうして自分がここにいるのか分からない。
気がついたら、ここにいた。

あたりを見渡したも、何も無い。

孤独に耐えられず、やみくもに走り出した。

しかし、いくら走っても、出口は見つからない。一寸の光さえ見えない。

自分の荒い息だけが響き渡る。

「お姉さん、だれ？」

ふと背後から声がした。

振り返ると、十歳くらいの男の子がいた。

「どうしてここにいるの。」

きれいな黒髪の少年。

会ったことは一度もないはずなのに、珠希は知っているような気がした。

「分からないの。気がついたらここにいて。」

珠希は少年の問いに答えた。

「僕もどうしてここに来たか覚えてないんだ。でも、ずっと前からこの闇の中に閉じこめられているよ。」

「ずっと独りで?」

「うん。僕独りで。」

珠希は、少年を見て、いたたまれなくなった

こんな暗い場所に、ずっと独りであるなんて…。

珠希が黙っていると、少年は再び口を開いた。

「お姉さんはもう帰ったほづがいいよ。早く帰らないと闇に閉じこめられてしまうよ。」

「でも…、さがしたけど出口は見つからなかったわ。」

すると、少年は両手を前に出た。

「大丈夫。僕ならお姉さんをここから出してあげることができるよ。」

少年が目をつぶると、光の穴ができた。

「ここからなら元の世界に戻れるはずだよ。」

「あなたは？」

珠希が少年に聞くと、少年は寂しそうに言った。

「僕はね、出られないんだ。ここに閉じこめられちゃったから…。」

珠希は、この少年を助けたかった。独りで寂しい思いをもつてほしくなかった。

「大丈夫。あなたも私とここから出られる。」

「えっ?」

「私と手をつないでいれば出られるはずよ。」

「でも…。」

心配そうに俯く少年に、珠希は優しく言った。

「絶対に手を離さなきゃ大丈夫。」

「うん!」

二人はかたくお互いの手を握った。

「さあ、早く帰ろう。」

しかし、二人が光の中に入ろうとすると、しょうねんの体を黒い影が包み込んだ。

少年は、どんどん引っ張られていく。

「やっぱり僕は、闇から抜け出すことはできないんだ。」

「そんなことないっ。…しっかり掴まってよ。私が引っ張ってあげるから。」

しかし、少年はどんどん闇の中に引きずり込まれていく。

珠希も引く力を強めるが、手に疲れがたまり、痺れてきた。

と、珠希の手から少し力が抜けた瞬間、少年はあっという間に闇に飲み込まれてしまった。

「待って!」

1・悩みの朝

自分の叫び声で目が覚めた。

息はまだ荒い。体は汗でびっしょり濡れている。

「嫌な夢…。」

珠希は先程の夢を思い出した。

夢なのに、妙にリアリティのある夢だった。

しかも、見た内容をまだ鮮明に思い出せる。

いつもの珠希であれば、夢などすぐに忘れてしまっただが。

とにかく、あんな夢を見たのは、珠希にとって初めてだったのだ。

「あの男の子、どうしたかな…。」

ふと、夢の中の少年が気になった。

珠希は、自分が助けられなかったことに心を痛めた。

たとえ夢であっても、あの少年を光のある世界へ連れ戻したかった。

しかし、珠希が手を離してしまったのだ。

しばらく考え込んでいると、一階から母親・佐江の呼ぶ声がした。

「珠希、学校でしょう？早く降りてきなさい。」

珠希は、我に返った。

「学校……。」

学校のことを思い出し、途端に表情が曇った。
夢の中の少年のことは、すっかり忘れてしまった。

ベッドから降り、制服に着替え始める。

珠希は、地元の高校に通っている。
学力のレベルはそう高くもないが、割と校舎は新しく、感じのいい学校だ。

制服を着込むと、自分の姿が鏡に映った。

映るのは、焦げ茶色のウェーブがかった髪の毛を肩の下まで伸ばした、スラッとした少女。

しかし、顔の表情は不安げで、髪の毛と同じ色の瞳には翳りがある。

光と輝きを失った姿…。

それが、珠希の今の姿だった。

「ほら、そんな顔しないで。お母さんが心配するから。」

珠希は、鏡の中の自分に言った。

深い溜め息をつくくと、重い足取りで階段を降りた。

「おはよう。」

無理やり笑顔をつくる。

「おはよう、珠希。」

佐江がフライパンを持ったまま振り返る。

「朝ご飯できてるから、食べて。お父さんは、昨日遅かったみたいだから、まだ寝かせておくわ。」

珠希の父・隆義は、警察官だ。夜遅く帰ってくることも珍しくない。陽気で活発な佐江に比べて、隆義は真面目で大人しい。

珠希は、父親似だと自分でも思っている。

「あれ？ご飯の量いつもより多くした？」

「そう。だって、もうすぐ剣道の大会があるでしょう。お腹すくかと思って。」

剣道か…

佐江の言葉を聞いて、珠希の心は暗くなった。

珠希は、警察官の父親の影響で小さい頃から剣道をやっている。それなりの成績も残っていて、この間の高総体では、一年生ながらも三位までのぼりつめた。

剣道は嫌いじゃない。でも…

「なあに？何かあったの？」

佐江の言葉に、珠希は我に返った。

「ううん。まだ眠いだけだから。」

「そうなの。ならいいけど。…早く食べちゃいなさい。」

珠希は黙って朝食を食べ始めた。

すると、隆義がリビングに入ってきた。

「おはよう。」

「あら、まだ寝てて良かったのに。」

「いや、昨日片付けた事件の後処理があるんだ。」

隆義が珠希の向かい側に座る。

「忙しいんだね。」

珠希は、父の疲れきった顔を見て言った。

「ああ。でも、今週末は休みをとったよ。」

隆義が微笑んだ。父が笑うのは、珍しい。

「へえ。何で？」

「珠希の試合だろ？日曜日は。」

「あ…うん…。」

また剣道のこと…

珠希は、少し苛立って、勢いよく席を立った。

「…「ごちそうさま」…」

「半分も食べてないじゃないの。」

「もうお腹いっぱい。じゃあ、行ってきます。」

珠希はぶっきらぼうに言うと、リビングを出た。

スクールバッグと竹刀袋を持つ。

荷物は、いつもより重く感じられた。

靴を履いて、外へ出る。

暗い面もちの珠希とは対照的に、朝日がきらきら輝いている。

「最悪……。」

お父さんたちに八つ当たりするなんて……

溜め息をつき、重い足取りで一步を踏み出した。

2・剣道部

放課後。

授業も終わり、珠希は荷物を持って部活へ向かっていた。

部活は学校の武道館で行われる。

珠希の学校には、他の武道の部活がないため、武道館は剣道部だけが使っている。

「お願いします。」

一礼して中に入る。

剣道は、礼儀を重んじている。

だから、出入りする度に礼をしないと、先輩に怒られてしまうのだ。

しかし、武道館にはまだ誰も来ていないようだ。

靴を脱いで上がり、奥の更衣室に入る。

更衣室は、防具の匂いで充満している。

普通の人であれば、この匂いを嫌うものなのだが、珠希は不思議と嫌いではない。
幼い頃から慣れ親しんできた匂いだ。

「素振りしてようかな。」

準備運動に、素振りをしようと思い、自分のロッカーを開けた。

「あ……。」

しかし、中にしまっているはずの袴と胴着がなかった。

珠希は、あわてる様子もなく、ゴミ箱の中を探し始めた。

すると、下の方にほこりまみれになった珠希の袴があった。

「やっぱりここにあった。」

ほこりを手で払う。

「また菊川さんたちがやったんだろっな。」

菊川和音。

珠希と同じ剣道部の一年生だ。

入部した当時は、仲が良かった。

しかし、高総体が終わってから、珠希は和音や他の一年生部員から嫌がらせをされるようになったのだ。

物を隠されることもあれば、竹刀で叩かれたこともあった。

珠希には、どうして自分がこのようなことをされるのか分からなかった。

もう私物を捨てられたり、暴力をふるわれるのは嫌だったが、言い返すこともできない。

だから、最近は部活に行くのが怖い。和音と一緒にいることが怖かった。

次は何をされるかと考えると、気持ちが悪く沈んでしまう。

でも、両親には相談はできない。
心配をかけたくない。

珠希は、いつも独りで泣くことしか出来なかった。

しばらくすると、部員も集まり、部活が始まった。

今週末が試合ということもあり、練習はいつもより厳しかった。

まだ団体戦のメンバーも決まっていないため、部員もいつもより気合いが入っていた。

珠希も団体戦のメンバーになって、先輩と試合に出場したいと思っていたが、一年生がレギュラーになるのは難しいと言われていた。

私は、無理だろうな…

珠希は選手になることを半ば諦めていた。

練習が終わり、部長が皆を集めた。

「少し遅くなっただけど、今度の試合の選手を発表します。」

部員たちの間に緊張が走った。
誰しもが、自分が選ばれることを期待している。
和音もだ。

「先鋒は、二年生八木志織。」

二年生の中で歓声が上がった。

志織は、二年生の中でも強いほうだ。

珠希は、志織を見て、微笑んだ。

八木先輩、よかったですね…

「次峰は、一年生沢村珠希。」

「え…。」

皆がその言葉に驚いた。

「次峰は、沢村珠希に決定しました！」

部長が高らかにもう一度言った。

珠希は、自分の名前が呼ばれたことが信じられなかった。

ぼかんとしていると、部長がまた話し始めた。

「一年生を選手に入れるかどうかは、すごく迷ったの。でも、珠希はよく頑張ってるし、この間の試合の結果も良かったから、選びました。だから頑張ってるね！」

「はっ…はい！」

思いがけない出来事であったが、珠希は嬉しかった。先程の嫌なことも忘れてしまった。

しかし、珠希は、和音が自分を憎しみのこもった目で睨んでいることに気がつかなかった。

中堅、副将、大将、さらに補員も発表され、その日は解散となった。

もう武道館には珠希しかない。

倉庫からバケツと雑巾を取り出し、一人掃除を始めた。

武道館の掃除は、普通一年生がする。

しかし、他の一年生は、二年生が帰った後に、珠希に任せて帰ってしまうので、いつも珠希一人で行っている。

「よし。」

気合いを入れ、雑巾がけを始めた。

今日はいいことがあったためか、あつてと言っ間に終わってしまった。

急いで着替えて外に出ると、空はもう真っ暗だった。

「早く帰らないと。」

しかし、珠希が帰ろうとすると、上から水が大量に降ってきた。

バシヤッ…

3・傷ついた心

「うつ。。。」

思わず目をつぶる。

水は冷たく、心臓が止まったようながした。

「先輩に少し誉められただけで、いい気になってるからだよ。」

「ほんと、ざまーみる。」

周囲から声がしたので、おそるおそる目を開けた。

目の前には、和音や他の一年生がいた。
和音は、バケツを持っていた。

「あんまり浮かれてるみたいだったから、水で目を覚ましてやったのよ。」

和音が意地悪そうに笑った。

バケツを投げ捨てて、珠希のほうへゆっくりと歩いてくる。

「ムカつくんだよ!」

和音は、珠希を押し倒した。

ドサ……………

珠希が地面に倒れこむ。制服や顔が泥で汚れた。

「あーあ、かわいいお顔が台無しよ。」

和音の言葉に、周りが笑う。

「くっ……。」

うめき声を上げて、珠希は起き上がろうとした。

ギョッ……

「ついたっ！」

しかし、手を和音に思いつき踏みつけられた。

「あんたさ、いい加減剣道部辞めれば？」

和音の言葉に驚愕し、珠希は顔を上げた。

「え……？」

「これだけあたしたちが嫌がらせしたら、普通やめるでしょ。」

周りにいたうちの一人が言った。

珠希は、和音を真つ直ぐ見据えた。

「私はやめない。どんなにあなたたちに嫌がらせされても、剣道部はやめないから。」

周りが静まった。誰もが珠希の気迫に圧倒されていた。

しかし、和音だけは違った。

珠希の言葉を聞いた瞬間に、怒りの表情があらわになった。

「はあ!？」

珠希の手から自分の足をどけると、珠希の竹刀を持ち、大きく振りかぶった。

和音は、躊躇なく珠希めがけて竹刀を振り下ろす。

「うっ……。」

珠希の背中に激痛が走った。

「目障りなのよ!」

珠希の声が響きわたる。

「いつも先輩の媚び売ってさ、ほんとウザい。」

「私…そんな媚び売ったりなんか…。」

「してるでしょ!」

和音の言葉に、珠希はビクッと震えた。

「いつも自分が剣道上手だってみんなに見せつけて……。今日だっ

てそう。心の中であたしたちの事馬鹿にしてたんでしょ！」

「そんな…。」

珠希は、自分がそんな風に思われているとは知らなかった。

私、ただ嬉しくて…。でも、馬鹿にしてなんかいないのに。

和音は怒りにまかせて、珠希を竹刀で何度も殴った。

「みんなね…あんなのことなんか大嫌いなんだから！……あたしたちも、先輩も、あんなこと嫌いなんだからね！」

「え……。」

その言葉は珠希の心に突き刺さった。

私、みんなに嫌われているの？

「あんだなんかさっさと消えればいいのに。あたしの前からいなくなつてよ！」

相変わらず、和音は珠希を殴り続けている。

しかし、シヨックを受けた珠希には、和音の攻撃に抵抗する気力は残っていないかった。

和音にされるがままになり、ボロボロになった珠希を見て、他の一年生が和音を止めに入った。

「ねえ、さすがにヤバいつて。もうやめよう。」

和音は、竹刀を持っていた手を下げ、珠希を見下ろした。

珠希は、ぴくりとも動かなかった。

「あなたは、誰からも必要とされてない。むしろ目障りなのよ！」

和音は、そう言い残して、その場から去っていった。

珠希は、ただうずくまっただけのことしか出来なかった。

学校を出てから、珠希は一人あてもなく町を歩いていた。

制服も顔も泥で汚れ、髪の毛も濡れているが、今の珠希には気にならなかった。

『みんなね…あんたのことなんか大嫌いなんだから!』

和音の言葉が蘇る。

知らなかった。

みんなに嫌われていたなんて。

自分が目障りな存在だったなんて。

周りには華やかな風景が広がっている。

明るい店や楽しげに歩く人々の中で、珠希は自分だけ周りに受け入れられてないような気がした。

『あんななんか、さっさと消えればいいのに。』

「私、いなくなったほうがいいのかな…。」

途端に、涙が湧き出てきた。

目の前が曇る。

「きつと消えたほうがいいんだよね。」

『そつぞ。この世から消えれば楽になる。』

どこからか声が聞こえた。

「だっ誰？」

珠希は、立ち止まって辺りを見渡した。

しかし、誰もいない。

「そら耳かな。」

しかし、声はまた聞こえた。

『そら耳ではない。後ろを見る。』

珠希が後ろを振り返ると、一台の乗用車が珠希に向かって突っ込んでくるのが見えた。

「ぎゃああああー！」

珠希は車に跳ねられ、そのまま意識を失った。

4・再び悪夢へ

気がつくくと、目の前には暗闇が広がっていた。

「……前に来たことある。」

珠希には、この場所に見覚えがあった。

「今朝見た夢の中だ。」

珠希はゆっくりと歩き始めた。

「私は、どうしてここにいるの？」

さっきまで自分が何をしていたかを思い出す。

和音にいじめられて、ショックで町を歩いていたら、車に…。

「そつだ。私は車に跳ねられたんだ。…私は、死んだの？」

『お前は、まだ死んでいない。意識を失って、夢を見ているだけだ。』

その声の主には聞き覚えがあった。

「あなたはさっきの。」

『いかにも。私は先程お前に囁きかけた者だ。』

「あなたはどこにいるの？」

『私の正体はこの暗闇。私は、お前が今見ている悪夢、“リバイア

”である。』

「私が見ている悪夢？」

『そうだ。正確には、お前が生み出した夢ではないがな。』

リバイアの声が響く。その声は、まるで心の中に入り込んでくるようだった。

『夢は生きている。お前たち人間は、毎日異なった実に様々な夢を見るだろうが、一度でも人間に見られたら夢はその後も生き続ける。私も、かつて一人の人間によって生み出された夢だった。』

「じゃあ、なぜ私はあなたを見ているの？」

『私がお前を呼んだからだよ。お前を死ぬ寸前まで追い込み、意識をここへ運ぶことによって。』

「あの事故は…、私が車に跳ねられたのは、あなたの仕業なの？」

『そうだ。私はあの時、世に絶望し、憎しみを抱えたお前を見つけた。そして、お前なら私と共に復讐を果たせるだろうと確信した。』

「復讐？」

『ああ。私は人間に恨みを持っている。他の夢たちにも。だから、自分を絶望に貶めた人間に復讐したいと願うお前とは、目的が一致するのだ。』

リバイアの言葉を聞いた珠希は、青くなつた。

「待つて！確かに私は、菊川さんたちに酷いことされて傷ついたよ。でも復讐なんて、しようとは思わない。」

すると、リバイアが嘲笑つた。

「何を言っている。それはお前の本心ではない。お前は、自分の恨んでいる者たちを苦しめ、地獄に落としてやりたいと思っているはずだ。」

「そんな…。」

珠希は否定しようとしたが、できなかつた。リバイアの言葉は、珠希の心に入り込み、感情を支配し始めていた。

『お前の望みは復讐。』

リバイアの言葉が頭の中で何度もエコーする。

「さあ、私の中に入れておくれ。共に人間を抹殺しようではないか。

」

すると、目の前に黒いうずが現れた。珠希を誘い出すように、ゆっくりと回っている。

「こっちに来なさい。」

珠希は、リバイアに逆らうことなく前へ進んだ。

もう少しでリバイアに取り込まれようとしていたとき、聞き覚えのある声を聞いた。

「だめだ！」

見ると、今朝の夢に出てきた男の子がいた。

「目を覚まして！こいつの言いなりになっちゃだめだ。」

その瞬間、珠希の洗脳状態がとけた。

「あっ君は…。」

「こいつに取り込まれたら、一生囚われの身になる。」

少年は、珠希を庇うように前に立った。

『手下の分際で邪魔をするな！』

リバイアが怒り、珠希を闇に引き入れようとした。

「まずい。早く逃げて！」

少年は、素早く珠希の背中を押した。

「わっ！」

珠希は、今朝の夢のように、少年の作った穴の中に落ちていった。

5・夢幻世界

目を覚ますと、見知らぬ場所にいた。

珠希の服はいつの間にか交換され、きれいな白い布団に寝かせられていた。

「ここは、どこ？」

体を起こして、部屋を観察する。

大きいテントのような感じで、簡素な作りの部屋だった。

「なんで、私はこんなところに？」

すると、突然声をかけられた。

「起きたのね。」

珠希の傍らに、長い黒髪の女性が座った。

年齢は二十歳くらいであろうか、整った顔立ちで明らかに美人の部類に入る。

「あなた、主の世界の人でしょ？森で倒れてたのを、私のおじいちゃんが見つけたのよ。」

突然切り出された話の意味を理解できず、珠希は戸惑った。

「あの…主の世界って何ですか？それと、あなたは一体…。」

「ああ、ごめんなさい。まだ名乗ってなかったわ。」

女性は、悪びれもせずに言った。

「私は、レイ。この夢幻世界の住人よ。」

「私は、沢村珠希っていいいます。」

珠希も一応名乗る。

「それじゃあ、珠希。あなたはこの世界の仕組みを知らないようだから、説明するわ。」

そう言うと、レイは手のひらを見せた。そこには、蝶のような模様がくっつきりと浮かび上がっていた。

「この夢幻世界は、あなたたち人間が生み出した夢の住む世界。この手の印は、私が夢であるしるし。夢であれば、必ずこの印があるの。あなたには無かったから、あなたが人間だって分かったのよ。」

「じゃあ、ここに住む人たちはみんな夢なんですか？」

「そう。でも、例外はある。私たちは、あなたたち人間の世界を“主の世界”と呼んでいるけど、稀にいるのよ。主の世界から迷い込んだ人間が。ここに来た人間は、夢から覚めることを嫌がる思いが強い人なの。だから、あなたがここにおいても私としては不思議ではないわ。」

「そうなんですか…。私は、こんな世界があるなんて知りませんでした。」

「人間は皆知らないわ。一つの夢を見るのは、大抵一度きり。夢なんてすぐ忘れちゃう人間が、夢の暮らす世界があるなんて考えつかないでしょうね。…ところで、あなたどうしてこの世界に来たの？」

「悪夢を見たんです。そして、知らないうちにその悪夢に取り込まれそうになって…。そうしたら、夢の中にいた男の子に助けられました。あとはあまり覚えてません。」

「そう。おかしいわね。悪夢が人間を取り込もうとするなんて…。そんなこと今までなかったのに。」

レイは、眉をひそめた。珠希ともう少し話をしようと思ったが、外からの叫び声に中断された。

「お前、今俺のこと蹴ったか？」

「蹴ってねえよ。馬鹿やろう。」

「なんだと!」

怒鳴り合いの声が聞こえた。

「酔っ払いの喧嘩かしら。」

レイは、呆れたようにため息をつく。外の様子を見に行った。珠希もあとについていくことにした。

レイの家の前には、すでに野次馬たちが集まっていた。
どうやらレイの予測通り、酔っ払いのささいな喧嘩だそつだ。

珠希とレイはしばらく見物していたが、やがてお互いに棍棒で殴り合いを始めると、レイも黙ってはいられなくなった。

「ちょっと、人の家の前で暴れないでくれる？」

レイが喧嘩をしている2人の間に入った。

「うるせえ！邪魔すんな。」

しかし、そのうちの1人がレイに向かって棍棒を振りかざした。

レイは、打たれると思い目をつぶったが、いつまで経っても衝撃は来なかった。

目を開けると、珠希がすぐ目の前に立っていた。道端で拾ったのであろう、木の棒で男の棍棒を受け止めていた。

「なっなにしてんだ！」

相手が動揺した際に、手にしていた棒で後頭部を殴りつけ、男を気絶させた。

「なんなんだよー！」

その様子を見て、もう一人は逃げていった。

「すげー！」

「酔っ払いを一発で黙らせたぞ。」

野次馬たちが騒ぎ立てた。

レイは、珠希を呆然と見つめることしかできなかった。

野次馬もいなくなり、珠希とレイは家に戻った。

部屋に入るなり、レイは珠希に言った。

「あなた、強いよね。びっくりしちゃった。」

珠希は、少し照れながら答えた。

「小さい頃から、剣道って言う武術を習っていたんです。」

「へえ、そうなんだ。」

「これは決まりだな。」

気がつくのと、老人が部屋に入っていた。

「おじいちゃん！」

老人は、レイには構わず珠希の前に腰を下ろした。

「お嬢ちゃん、この世界にいる間は、ハンターになるといい。」

「ちょっとおじいちゃん！勝手なこと言わないでよ。」

「わしもさっきまで、あんたの戦いを見ておったが、充分素質はあると思うんじゃないの。」

二人は、言い争いを始めた。

珠希は、何のことだか分からず、レイに聞いた。

「あの、ハンターって何ですか？」

「ハンターって言うのはね、悪夢狩りをする人のことよ。悪夢はほうつて置くと悪さをするわ。だから、ハンターは悪魔を倒す仕事をするの。」

レイは、ため息をついた。

「ハンターは、この世界の保安部に属する。私も保安部で働いてるんだけど、ついこの間メンバーが一人足りなくなっちゃったの。それで、うちのおじいちゃんが……。」

老人は、一気に珠希に詰め寄り、話し出した。

「そうなんじゃよ。わしは、ムササビとってのう、レイの祖父じや。さっきあんたの手捌きを見て、ピーンときたんじゃよ。わしは、あんたがハンターに適役だと思ってな。」

「はあ……。」

珠希は、返答に困惑する。

「おじいちゃん！ハンターが危険なことは、知ってるでしょ!？」

「よく考えてみるんじや。ハンターとして旅を続ければ、この子が主の世界に帰るすが分かるかもしれんぞ。」

「そうなんだけど……。珠希は、まだここに来たばかりだし。」

「そんなのそのうち慣れるわい。」

再び二人の口論が続く。

珠希は、しびれを切らして口をはさんだ。

「あの…、今のお二人の話を聞くと、ハンターって怪物退治みたいなものですよ？私、そんなの無理です。別に、すごく強いわけでもないし。」

「しかしな、あんたがさつき酔っ払いどもをやっつけるのに使った棒はな、わしの杖なんじゃよ。あんなにボロボロにしてみましたは、働いて弁償してもらうしかなあ。しかし、この世界に、あんたができるような仕事は、ハンターくらいしかないぞ。」

ムササビが、意地悪そうに笑った。

「そんな！」

「残念じゃ。ハンターになればなあ、給料も貰えるんじやがのう。」

もはや、ムササビに逆らうことは不可能だ。

レイを助けるためだったとはいえ、ムササビの杖を壊してしまったことは取り返しがつかない。

珠希は、嫌々ながらも従うことにした。

「分かりました…。ハンターになって、杖を弁償します。」

「よしよし。よく決断した。」

うつむく珠希に、ムササビは満足そうに言った。

「まったく、おじいちゃんは。また、無理なこと人に押し付けて。」

レイは、そんな祖父を呆れたように見つめていた。

私、大丈夫かな？

了承はしたものの、珠希は心配だった。

まだ来たばかりの夢幻世界での生活に、不安だけがつのっていった。

6・涙と出会い

翌日…

珠希は、ひとりで保安庁に向かっていた。

本当ならレイも着いてくるはずだったが、用事があらしい。

珠希は、レイの書いた地図を頼りにここに来た。

歩きながら町並みを見物する。

夢によって創られる世界だけあって、いろいろなものが混ざっている。ちぐはぐな風景だ。

百年前くらい前の服を着ていても、携帯電話のようなものを使いこなしている者もいる。

さらに、今までに見たことがないような生物が飛び回っていたりする。

「私…本当に別の世界に来たんだ。」

昨日はいろいろあって、驚く暇も自分の境遇を考える暇も無かった。しかし、周りをよく見ると、自分が全く知らない世界へ放り込まれてしまったことが嫌でも分かってくる。

(急に私の意識がなくなったら、みんな心配するよね。)

レイは、夢幻世界に迷い込んだ人間は、意識だけが移動し、体は元の世界に残ると言った。
だから、珠希は元の世界では今ごろ意識不明の状態なのだろう。眠り姫のように。

珠希は、目を覚まさない自分を心配する父と母の姿を思い浮かべた。

(早く帰りたいたい…。)

いつも通り学校に行って勉強して、剣道して…。

「でも、私みんなに嫌われてるから。…元の世界に帰っても、また辛い思いするだけかも。」

珠希は、この世界にくる前のことを思い出した。

「あっちにもここにも、私の居場所なんて無いのかもしれない…。」

珠希の目から、涙が溢れてきた。

今までいじめられてきた苦しみや憤り、嫌われた悲しみ、知らない

世界に來た不安…。
いろいろな思いが一気に溢れてきた。

道行く人々が、心配そうに見るが、珠希はかまわず泣いた。

しばらく泣いていると、いきなり頭をチョップされた。

ガツンッ

「痛い！」

「人前で泣くな！」

涙を拭って振り返ると、若い男の人が立っていた。

「迷惑なんだよ。邪魔だし、うるさいし。」

「あ……すみません。」

珠希は慌てて頭をさげた。

「だから泣き虫は嫌いなんだ。」

男は悪態をついた。

珠希は顔をあげて、よく男を見た。

「あ…。」

「なんだよ。」

「あの、前にどこかで会いました？」

艶やかな黒髪に、髪と同じ色の漆黒の瞳…。
珠希にはその男に見覚えがあった。しかし…

「いや、初対面だ。お前みたいな奴、一度会ったら忘れねえよ。」

「そうですか…。」

男は珠希を睨むと、去っていった。

「おかしいな。絶対どこかで会ったことあると思ったんだけど。」

珠希はその後ろ姿を眺めながら言った。

7 仲間(前書き)

誤字の訂正、ご意見・感想などございましたら、よろしく願います。

7・仲間

珠希が保安庁に着くと、五十代くらいの体格のいい男が出迎えてくれた。

「ようこそ。ハンター本部へ。私が、本部長のジョーダんだ。」

ジョーダンと握手をする。

「沢村珠希です。あの、私…。」

「話はうちの職員のレイから聞いている。なんでも、君は主の世界からの迷い人だそうじゃないか。」

「はい。」

「ハンターは、この世界で一番危険な仕事だ。この世界に慣れていない君には、過酷な職業となるかもしれない。」

「……はい。」

「普通、ハンターは年に一回のテストに合格しないと入れない。しかし、今年の試験は終わっているし、きみはレイとムササビさんが推薦されているからハンターになることを許可しよう。」

そう言うと、ジョーダンは葉巻を吸い始めた。

「君の力を信用しようと思う。ハンターになる覚悟は、できているね？」

「はい。」

珠希は、小さな声で答えた。

（元の世界にはいつ戻れるかわからない。この世界で生きるには、働くしかないから、仕方ない。ハンターになるしかないよね…。）

ジョーダンは、珠希をしばらく見つめていたが、一つ咳払いをすると、再び話し始めた。

「よろしい。では、ハンターについて説明しよう。ハンターの仕事

が、悪夢を倒すことなのは知っているね？」

「はい。」

「ハンターは、5人チームで活動する。ファイター4人と司令官1人だ。だから、報酬もチームの成績によって決まる。」

「チーム……。」「

「レイが君のチームの司令官だ。」

「そうなんですか。」

知ってる人が一緒だと知り、珠希は少しほっとした。

「基本的に、ハンターは各地を回って旅をする。近くに悪夢が出れば、本部が悪夢の居場所を司令官に伝え、その場所に向かう。ここまでの話は、分かったかな？」

「はい。」

「では、ハンターに必要なものを渡そう。」

ジヨーダンは、引き出しのから何かを出した。

「まずこれは、服だ。なるべく戦いやすい服装がいろいろ。」

渡された服は、黒いトップスにベージュのショートパンツ、黒いロングブーツという、地味なものだった。

「そしてこれは、連絡器だ。チームの仲間と連絡に使える。そして次は……。」

ジヨーダンは、椅子から立ち、壁際の棚の中から剣を取り出した。鞘を抜いて、剣先を珠希に突きつける。

「これは、君の武器だ。君は剣術をやっていたと聞いたが。」

「はい。剣道を少し。」

「ならば、これで良いだろう。」

ジョーダンは、再び剣を鞘に収め、珠希に差し出した。

「これを受け取れば、君は正式にハンターの一員となる。もう一度聞くが、本当に覚悟は決まっているんだね？」

「はい。」

珠希は、剣を受け取った。

「では、沢村珠希をハンターとして承認しよう。」

ジョーダンの言葉と同時に、ドアがノックされた。

コンコン

「本部長、失礼します。」

入って来たのは、レイと知らない2人の男、そして先ほど町であった若い男だった。

「あっ、お前！」

「あなたはさっきの！」

互いに驚きの声を発する。

「あら、知り合いだったの？」

レイが、聞いてくる。

「知り合いじゃありません。こいつがなんでここにいるんですか？」

若い男が声を荒げた。

「陽、今紹介するから少し待て。」

ジヨーダンが、私の隣に並んだ。

「この方は、珠希さん。君たちの新しい仲間だ。」

「えっ？」

珠希と陽と呼ばれる男が同時に聞き返した。

「珠希さん、これからこいつらが君のチームの仲間だ。みんないい奴だから、安心するといい。」

「あ……はい。」

ポン

心配そうにしている珠希の肩を、レイが叩いた。

「改めてよろしく。分からないことがあったら私に聞いて。」

レイの優しい表情に、安心する。

レイが話したのを期に、他のチームメイトも珠希に近付いてきた。

「新しい仲間が、女の子なんて嬉しいなあ。」

ひよろつとした金髪の男性が、言った。

「俺は、セルデイス。よろしくね、珠希ちゃん。」

セルデイスの隣に立っている体格のいい男も名乗った。

「俺は、キールだ。」

2人とも珠希を歓迎している様子だったので、珠希は安心した。

「陽も挨拶したら？」

セルデイスが陽に言うが、陽は何も言わない。

「……………」

陽は、黙ったまま珠希を睨んだ。

珠希は、その視線の痛さに思わず目をそらした。

しばらく沈黙が続く。

「もうしょうがないなあ。こいつは、陽。ごめんね、気難しい奴だから。」

セルデイスが気を利かせて、珠希に教えてくれたが、陽の態度が気になって仕方なかった。

(私…嫌われたのかな…。)

相変わらず睨み続けている陽に、不安が募っていった。

8・初仕事

珠希たちは、保安庁を出るとすぐに、町のはずれに向かった。

「早速指令をもらったわ。新メンバーでの初仕事よ。」

レイが方位磁石を見ながら言った。

「おいおい。まだ保安庁出てすぐだろ？早すぎねえか？」

キールが呆れたように反論した。

「まあ、珠希ちゃんは全然この世界のこと知らないみたいだし、早めにハンターのことを分かってもらうにはちょうどいいかもよ。」

セルデイスの言葉に、キールは肩をすくめる。

「そういうことは、さっぱり分からない。」

「そつでしようね。」

レイは、キールをチラツと見て可笑しそうに笑った。

「それはいいとして、セルデイスの言う通りよ。本部長は、珠希が早く慣れないといけないからおっしゃったわ。」

「はい。」

珠希は真剣に頷いた。

「ターゲットは、この森に現れるそつよ。まだ森に留まっているままならいいけど、町に来たら大事よ。なんとしても、森から出さないうちに片づけて。」

「了解。じゃあ、二手に別れたほうがいいかもしれない。森は広いから探すのも大変だし。」

セルデイスはそう言うと、珠希と陽を見た。

「俺はキールと組む。珠希ちゃんは陽と組んで。」

「…………え？」

一瞬耳を疑った。

(私が、陽さんと?)

「何で俺がこいつとペアなんでしょうか。」

案の定、陽は不満を露わにしていた。

「だって、珠希ちゃんは初めてだから、陽なら優しく教えられるかなあと思って。すぐ仲良しになれそうだよ。でしょ、珠希ちゃん。」

「いや…えっと…………仲良しは…………。」

恐る恐る陽のほうを見ると、珠希を睨みつけていた。

(怖い!私、この人と一緒に大丈夫かな…)。

ため息をつく。

そんな様子を、セルデイスは楽しそうに眺めていた。

「必要なことは、全部陽が教えてくれるからね。」

「はい。」

(一応挨拶しといたほうがいいかな。)

しかし、陽のほうを振り返ると、陽はすでに歩き始めていた。

「えっ?……ちょっと、待ってください!」

珠希は、急いで追いかけた。

「頑張れよ!」

後ろからキールの声が聞こえてきた。

「私、この仕事でやっていけないかも……。」

ため息をつきながら、陽を追いかけて走った。

9・自分の甘さ

「あっあの……。」

ようやく陽に追いついた。

「よろしくお願いします。」

頭を下げる。

しかし、陽は無視して歩き始めた。

（やっぱり嫌われてるみたい。）

珠希はがっかりしたが、並んで歩き始めた。

しばらくの間、無言で歩き続けたが、珠希はこの沈黙に気まずさを感じていた。

（なにか喋らないと。でも、話題無いなあ。話しかけづらいし。）

珠希は懸命に話題を考えた。

そして、なんとか一つ思いついた。

「あの、お年はいくつでしょうか。」

機嫌を伺うように聞いてみるが、陽は相変わらず無反応だ。

(やっぱり年齢聞いたら失礼なのかな……。でも、年上とか年下とかが分からないと、呼び方に困るし。)

すると、意外にも答えてくれた。

「289歳。」

「え？」

「だから、俺は289歳。」

珠希と同じ年くらい容姿には、あまりにも違いすぎる年齢に、珠希は困惑した。

(289歳!?!?...本当なのかな。でも、夢の世界だからこういうのもアリなのかもしれない。)

「へー、すごいですね。私の大先輩...。」

ぎこちなく笑う。

「本当に信じてんの?」

「え?」

「俺が289歳なわけない。19歳だ。普通こんなのに騙されないだろ。」

「嘘だったんですか!」

「ああ。」

陽はさらっと言った。

珠希は自分がさっきまで困惑していたことが、馬鹿らしく思えてき

た。

(なんだ……。びっくりした。)

「じゃあ、陽さんは私より二つ年上なんですね。」

「……。」

「あの…陽さん。」

陽は、珠希を無視して遠くを睨みつけていた。

「出た。」

「え？」

陽は、自分の剣の柄に手をかけた。

「悪夢が出た。」

ザザザザザ

「ウオーー！」

一瞬にして、二匹の大きな怪物が二人の前に立ちふさがった。全身は黒い毛で覆われており、目はうつついていて、手には鋭いかぎづめがのびていた。

「これが…悪夢。」

想像していたよりも、あまりにも凶暴な姿に、珠希は圧倒されていた。

「二匹か…。」

陽は剣を構えた。

「俺はこっちの一匹を倒す。お前は、もう一匹を倒せ。」

そう言つと、陽は勢いよく悪夢に向かっていった。

悪夢は素早くかぎづめを叩きつけるが、陽はそれをかわし、腕に鋭

い一撃を与える。

素早く無駄な動きのない剣さばきに、珠希は見とれていた。

「すごい…。」

すると、もう一匹が珠希をかぎづめで引き裂こうとした。

「つつ！」

すんでのところかわし、珠希も剣を抜いた。

「私も戦わなきゃ。」

剣を構え、悪夢との距離をつめようとする。
しかし、体が動かなかった。

（何これ……。足が震えて動かない…。）

珠希の足はがくがく震えていた。
前に進めず、冷や汗が流れる。

「ぎょじつぎょじつ。。」

その時、悪夢が珠希めがけて突進してきた。それでも、体は思うように動かなかった。

(やられる…!)

悪夢が腕を振り上げた瞬間、思わず目をつぶった。

ザッ

「ギヤアアアア!」

しばらく身構えていたが、悪夢が襲ってくる様子がない。しかも、なぜか悪夢の悲鳴が聞こえてきた。

おそるおそる目をあけると、珠希の前に陽が立っていた。

「陽さん!」

悪夢は陽に腕を切り落とされたようで、叫び声をあげながら逃げ去った。

横を見ると、もう一匹はすでに陽に倒されたようで、血だらけになって倒れていた。

(陽さんが助けてくれたんだ。)

「あの、ありが…」

ガツンッ

珠希がお礼を言いかけたると、陽が剣を地面に突き刺した。

「お前、いい加減にしろよ。」

「え……?」

陽は、怒りのこもった目で珠希の目を見つめていた。

「悪魔が怖かったのか?……ふざけるな。俺たちは、いつだって危険と隣り合わせで戦ってたんだ。この世界の人を守るのが仕事なんだ。怖いから戦えないような奴は、さっさと辞めろ!迷惑だ。」

珠希は、陽の顔が見れなかった。
先ほどゴードンと交わした会話を思い出し、自分が情けなくなった。
自分の甘さをやっと思い知った。

「……まだ一匹生き残ってる。今日はここにテントはって見張るぞ。」

陽はそう言い残すと、森の奥に入っていった。

珠希は、ただ黙って涙をこらえることしかできなかった。

夢幻世界の夜空はきれいだった。満天の星が数多く輝いていた。

珠希の世界では、街の光や月の明かりで、こんなに多くの星を見ることはできない。しかし、夢の世界はそんなことは関係ないのかもしれない。月がどれほど明るくても、街が夜中までにぎわっていても、人々は満天の星空をいつも眺められる。

「こんなにきれいな星空は初めて。」

珠希は自分のテントの前に座り、星を眺めていた。

悪夢に逃げられたあと、陽とは別にテントを張って眠ることにしたのだ。しかし、疲れているにも関わらず、なかなか眠ることができなかった。

『さっさと辞めろ！迷惑だ。』

先ほどの陽の声が頭の中に響く。

悪夢退治なんて、簡単なものだと思っていた。まさか怪物と戦うことになるなんて、考えてもみなかった。

初めて見た悪夢が怖くて何もできなかった。

「私は、やっぱり弱い人間なのよ。ただ怖いからって、前に進めなかった。だから、前の世界でも菊川さんたちにやられっぱなしだった。」

腰に下げていた剣を両手に持った。

「この剣も頂くべきではなかった。私は、ハンターなんかになっちゃいけないかった！」

涙が頬をつたった。

訳も分からずに夢幻世界に迷い込み、いつの間にか珠希はハンターになっていた。
しかし、ハンターになったのも、何も分からないこの世界で生き延びるための自分の居場所が欲しかったから。

陽たちのように、命を落とす覚悟や人々を守るうとする意識があったわけではない。

涙を拭って立ち上がり、夜空を見つめた。
そして、陽のテントの方を向いた。

(これ以上迷惑かけないうちに、ハンターをやめよう。)

11・悪夢再び

陽はテントにはいなかった。

中には布団がぐちゃぐちゃに置かれていて、先ほどまで寝ていたのが分かった。

「陽さん？」

呼びかけてみたが返事はない。

「どこに行ったんだろう。」

陽の姿を捜していると、森の奥から凄まじい叫び声が聞こえた。珠希には、それが何の叫び声がすぐに分かった。

「ガアアアア！」

叫び声が何度も響いた。

「これは、悪夢の…。」

珠希は、はっとして陽のテントを振り返った。

（まさか…陽さんは一人で!?!）

珠希は剣を素早く握りしめ、叫び声のする方向へ走り出した。

ガキンッ

悪夢の鋭いかぎづめと陽の刀がぶつかる。

「ちっ。また避けられたか。」

陽は一旦悪夢と距離をとり、汗を拭った。

（やはり一人ではキツイか…。）

ハンターは普通チームで戦うものだ。戦闘能力に優れた悪夢に一人で立ち向かえる者は、滅多にいない。

しかし、陽は珠希を連れてこなかった。

昼間の様子から、珠希が戦力にはならないと判断した。

けれども、それは珠希への危険を考えたからでもあった。

(今あいつに戦わせれば、あいつは死ぬかもしれない。だから、今日は俺が独りで……)

「陽さん!」

背後から声がした。

「お前……。」

陽の後ろに立っていたのは、まぎれもなく珠希だった。

(まさか……。どうしてここに?)

珠希は森の中を走り回った末に、ようやく陽を見つけ出した。
珠希の思った通り、陽は昼間の悪夢と戦っていた。

「ばか!どうしてここに来た。」

「悪魔の声が聞こえたんです。そしたら、陽さんもいなくて……。」

その時、悪夢がよそ見をしていた陽に襲いかかった。

「ガアアアア!」

「うっ……。」

陽は右腕を切りつけられて倒れた。

「陽さん!」

「来るな。」

駆け寄ろうとした珠希を陽は制した。

「危険だ。隠れてろ。」

陽はよろめきながら立ち上がった。

腕からは血がどくどくと流れ出ていた。

陽は悪夢から目を離すまいとしていたが、もう戦える状況ではなかった。

(陽さん……。私のせいで……。)

珠希は倒れた陽を呆然と見ていた。

(私が弱いから。迷惑ばかりかけて……。)

「ガアアアアアアア！」

悪夢が陽にとどめを刺そうと腕を振りかぶった。とっさに陽は目をつぶった。

「危ない！」

ガキンッ

陽の目の前で鋭い金属音が鳴り響いた。
目を開けると、陽の前に珠希が立っていた。
必死に悪夢のかぎづめを剣で防いでいる。

「珠希！」

（怖いなんて言ってもらえない。ここで勇気を出さなくっちゃ。）

「えい！」

力を振り絞り、悪夢を押し返す。

（私はすごく弱いし、ハンターなんか向いてないけど、頑張りたい。この世界で自分を変えられるなら、変えてみたい。）

珠希は剣を構えた。

「よし。」

珠希は剣を構えたまま、悪夢に向かって走り出した。

「ガアアアアアア！」

悪夢が珠希めがけて攻撃してくる。

珠希は鋭いかぎづめをかわすので精一杯だった。

「まずは、あの爪をなんとかしないと……。」

珠希は悪夢が振り下ろした腕を、素早く切り落とした。

「ガアアアアア！」

腕をなくした悪夢は痛みあまりに叫び声をあげた。

「よし。」

悪夢が怯んだ隙を逃さずに、珠希は悪夢に向かって大きくジャンプし、悪夢に剣を振り下ろした。

「やああああ！」

ザクッ

「ギヤアアアアア！」

悪夢は鋭い悲鳴を上げて倒れ、動かなくなった。

珠希は悪夢を倒した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9978t/>

Nightmare

2011年10月28日15時11分発行